

お春『是れは誰方かは存じませぬが、妾は非人の不具者、妹などは持ちませぬ、大方お人違ひで御座いませう、サツサとお歸りなさいませ』と云ひながら四邊みまわし眼で知らず、お花はこの意を悟つて、

お花『これはくは失禮を致しました、其方の顔が妾の姉に生寫しであつたので遂ひ飛んだ事を申しました、妾は目下近習目付役の花房彦四郎様の御屋敷に召抱えられてゐまする下女で花と申します、花房様は御慈悲深い方故用事があれば……いえく貫ひのない時は訪ねてお出で、一膳の御飯ぐらいは恵みませうほどに……』

お春『有難う存じます、妾も毎日この寺の門に居つて合力を乞ふており

まするが、まだく時節到來せぬと見えて尋ねる人には會ひませぬ、いや夫は妾の勝手な愚痴で御座います』

兩人は四邊に氣を配りながら頻に芝居をやつてゐる。語る内にそれとなく敵のまだ知れない事を知らし合ひ、無念の涙を押しながらお花は買ひ求めて來た餅菓子、ソツと小屋に入れて置いて、惜しい別れを告げて此の場を立ち去りました。あとで方々の小屋から出て來た乞食、

乞食『オイく新入、お前はあの女中と近付きか、大層親げに話してゐたぢやねえか』

お春『申戯ぢやありませんよ、彼歴立派な方に近付きがあれば幸福だけれ



ど、合憎で御座いましてね、併し彼の方の姉さんとやらに妾の顔が似てゐると云ふので、寸志だと、この様に菓子置いて行きました』  
を食『そいつは豪氣だ』  
お春『一つ宛でも皆さまで分配て、喰べて下さいませ』  
を食『分配か、そりや有難い、オイ皆のもの折角だ遠慮なしで頬張らうぢやなかい』

(二十五)

話變つてお花は無事に代參を済まして、花房の屋敷に戻つて來ると、

其の留守中に一人の來客があつた。來客と云ふのは新規御召抱への中田大治郎、彼のお春お花が敵と狙つてゐる中川大右衛門であります。什麼云ふ譯で大右衛門が花房の屋敷に來たかと云ふと、昨年の秋流れくつて津輕城下に來た時に、此の花房彦四郎と荒井孫左衛門の二人が世話をして、殿に推奏したので五人扶持で召抱へられる事となつたのです。大右衛門は水戸の浪士中田大治郎と偽名してゐると、水戸と津輕と可成り離れてゐるので舊惡は知れずにゐる。

中田は座敷に通つて、主人彦四郎と相對しまして、  
『暫時御無沙汰を致しました』



彦四『いや無沙汰はお互ひでござる、併し今日はよく出掛けて來ましたな』

田『什麼も勝手な時ばかり御邪魔致します』

彦四『爾うでもござらぬ、今日は拙者も非番で退屈してゐました。如何でござる、一局圍んでは……』

田『園碁でござるか、園碁も面白うござるが拙者は少しく多忙で遊んでゐられません、實は明朝早くから江戸表へ登れよと殿の仰せでござるの』

彦四『ホ、一是は知らなんだ、御身が江戸登りを、左様で御座つたか』

田『それに付きまして、甚だ勝手ながら御願があつて今日罷越したので』

「ござるが……」

彦四『何にかは存じませぬが、出来る事なら御世話を致しませう』

田『御願ひと申すのは外でもありませんが、拙者の留守中愚妻ところ慣れませぬ故何かと支障へ多からうと考へます、依つて、御當家のお召遣ひの下女を、四五日拜借致したいので御座る』

彦四『いや解りました、拙者の方も下女は一人で手離せないのであるが、御身の事でござれば十日だけお貸し申しませう』

田『早速御承知下されて何んともはや……』

それから彦四郎は奥方と呼んで、十日の間お花を中田大治郎に貸すや



うに話をする、奥方はハイとばかり、お花の歸宅を待つて居ると、首尾よく代參をすましてお花は戻つて來た。奥方は一間へ招ねいて、

奥方『什麼も御苦勞でした』

お花『什麼致しまして……』

奥方『あの花や、和女は氣の毒ながら十日ばかり他家へ手傳いに行つて呉れませんか』

お花『ハイ』

奥方『旦那が江戸へ出發なさるので奥方一人で淋しいから來て呉れよと頼れたのだから』

お花『畏まりました、併し誰方様の御宅で御座います』

奥方『内の旦那様が御世話で御使者番に奉公なされた中田大治郎殿の宅です』

お花『えッ、中田……』

奥方『和女は中田さんを知つてゐるのかえ』

お花『否え……別にお顔は存じませんが、御名前だけは聞いて居りました』と、口では云つたもの、胸はドキ／＼波打つて、尋ね探した中田大治郎に面會するのみか、其宅へ出掛けるのは、恐ろしいやうな嬉しいやうな心地がする、併し、水戸から來た夫婦者の浪人と云ふだけで、お春もお花



も中川大右衛門の顔を知らないのであるから、眞に其中田大治郎なるものが中川大右衛門であるか什麼か、確りした證據がないから、『だらう』と思つてゐるだけで、『さうだ』とは斷じ難いのであります。お花は考へた。丁度幸ひの時であるから中田大治郎の屋敷へ乗り込んで、秘密を探つてやらう、若し、確にこの大治郎が大右衛門であつたなら、早速姉を呼んで敵討ちをしたいもの、虎穴に入らすれば虎兒を獲すと云ふ譬もあるからと、度胸を定めて、

お花『それでは參りますが、只今からで御座りますか』

奥方『先方は翌朝出發れるさうだから早い方が可いのでせう』

それではとお花は着物を着替まして、座敷に出ると中田大治郎が待つてゐる。是が父を殺した中川大右衛門であるかと思ふと、思はず知らず眼が釣つてくるのを、悟られてはと氣を取り直し片隅に畏まる。

彦四『これが當家の下女でござる』

中田『ハ、ア、若侍の噂の種になるのも尤もく……それでは暫時拜借致します』

彦四『さアく……お花、氣の毒ぢやナ』

お花『否え、什麼致しまして……』

中田『然らば御免下さい』と、お花を同道して大治郎はおのれの屋敷に立



歸りました。

(二十六)

お花を連れて我家に戻つて来た大治郎。

大治「今歸つた」と云ふと出迎へた妻のお新、

新「お歸り遊ばせ」

大治「花房殿に御願ひして、和女の相手にこのお花殿を拜借して来た」

新「それは、和女はお花さんと云ひますか、よく来て呉れました」

お花「ハイ」

挨拶も済んで後、急ぎの旅立ちと云ふのでとどしと支度にませッ返してゐると、兼て注文してあつたと見えて、道具屋体の若者が新作の一刀を持參した。

若者「へい今晚は、御注文の刀を持つて參りました」

大治「御苦勞々々々、それでは手付けの上に最早五兩出すのであつたな」

若者「へい左様で」

若者は五兩の金を貰つて歸る、あとで大治郎は、赤ン坊が玩具を買つて貰つたやうに、ほくほくもので、鞆を拂つてためつすかしつ蠟燭を燈さして刀身を眺めてゐると、下男ひなんの藤藏とうざうと云ふ奴が、



藤藏「旦那、大層立派な刀が買へましたな」

大治「ふゝゝ、價が値だから別によい事もないが、新刀にしちやよく出来てゐる」

藤藏「へエー、新刀つて奴は試して見んと解らんさうでげすが、一つ試し斬りをやつて御覽なせい、俺も一緒ににお供して見物しますから、人の斬られて死ぬのはまだ一度も見つた事が御座いませんで、一度見て置きたいのでがす」

甚い事を云ふ奴です。

大治「ウム、俺も試し斬りをやつて見やうと思つてゐるのだが、此處ぢや

斬る奴が居ないから、江戸へ行つたら決つて見やう」

藤藏「旦那」

大治「何んだ」

藤藏「わざわざ江戸まで行かなくつても、此津輕にも斬り捨ても差問えない奴がごろ／＼してゐますぜ」

大治「え、そりや何處だ」

藤藏「現昌寺裏の乞食ヶ原でげす」と云ふと大治郎はボンと膝を打つて、

大「成程それはよい所へ氣がついた」

藤藏「足の壯健な奴は逃げるかも知れませんが、壁の若い女が近頃來てゐる」



ますから、其奴を斬つたら可いでせう』

大治『好矣々々、兎に角俺は道不案内だから貴様も供をしろ』

藏藤『其奴は私の希望なんで』

と、類をもつて集る悪人同士、主が主なら家來も家來、到底二人は身輕な扮装をして、大治郎は新身の一刀を腰に、藤藏は提灯を用意し、乞食ケ原へ急いだのであります。この有様をチラリと眺めたお花は吃驚仰天乞食ケ原に近頃現れた女の躰と云へば、云ふまでもなく姉のお春の事であらう、これは什麼したら宜らう、一走りして姉に知らさうかと思つたがそれも女の足でとても及ぬ事、まゝよ姉とても戸田流の奥儀に達して

ゐるのだもの、彼等の二人や三人に、暗々と討れるやうな事はあるまい運は天にあり、霎時様子を見て居ませうと、度胸を据えて神佛を念じてゐました。

此方は中田大治郎と下男の藤藏の兩名、足を早めて乞食ケ原に着いたが、探り探つてお春の小屋の前までくると、藤藏は提灯を振り翳して、藤『起きろ!!』

起きろと云はずとも、心得あるお春の事、忍び足に近づくものがありと悟つて、チャンと眼を醒まして息をころしてゐたのであります。お春『……………』



藤「起きろ、女躰起きろ!!」

お春「誰方かは存じませぬが夜も更けてゐますから、用事があれば明日お出で下さいませ」

藤「乞食の癖に生意氣を云ふな、起きたらこれまで出る」

お春「ハイ、夫ではお目に懸りませう」

と、小屋を出やうとする、待ち構へた大治郎が、抜手も見せず「ヤッ」とばかり斬り付けた、哀れ、お春は眞二つになつたと思ひきや、すらりと抜けてキツト身構へ、

お春「ヤア卑怯者、何故あつて妾を斬らうとする」

藤藏「洒落臭い、聞きたきや云つてやらア、俺の御主人様が新身を御求になつたから、生き甲斐のない貴様を試斬りなさるのだ、さ、有難く思つて神妙に刀の錆となれ」

お春「ホ、何かと思へば試斬りかえ、それぢや見事に斬られてあげませう……と云つたらお前の方は都合がよからうが、妾の方で都合が悪いまア御免蒙りませうよ」

大「え、ツ面倒だツ」

と、再び鋭く斬り込んだが、お春はモ、ラ笑ひながらヒラリと体を轉し、斬り損じてたちくと空を泳ぐ奴を手許に飛び込みざま、小手を強



か打つたので、堪らず大治郎は刀を落とす、お春はその刀を手早く拾つて提灯を振り翳して呆然としてゐる藤藏を目蒐け、

お春「ヤッ！」

とばかりに唐竹割。

(二十七)

藤藏は血煙をたて、ぶつ倒れる、大治郎はおのれツと叫んだもの、肝心の刀をお春に奪れてゐるので手出しが出来ぬ、小刀はあるけれど、藤藏を真二つにした腕前に恐れて、

大治「今に見ろよ、の捨科白を残して急いで我家に立ち歸り、女の非人輩に下男を討れたのは末代までの恥辱であるから、早速復讐に行かねばと自分の組下の足輕小者十何名を呼び集めて、手槍を引提げ、弓張提灯を振り照して、鯨波を作つて乞食ヶ原へ押し寄せました。

お花は南無三寶、姉様が如何に腕が秀でゝゐると云つても、あの大勢に圍れたなら一命の程も危なからうと思つたので、お新の前に出て

お花「あの甚だ恐れ入りますが、一寸花房さまの御屋敷へお歸し下さいませ」と頼む

お新「何用です」



お花『別に用事は……あのそれ一寸忘れものを致しましたから取つて参ります』

お新『それなら翌日の朝でもよからう、今宵は宅もごたくしてゐるから留守居をしてゐておくれ』

お花『ハイ……』と答へたものゝ、氣の氣でないので自然と顔色も變り、何となくそはくする。様子を見て取つたお新は冷笑しながら、

お新『あゝ解つた、お前さんの一寸歸りたくなつた譯が解つたよ』

お花『えッ』

お新『何んだらう、お前さんは旦那が乞食を殺しに行つたから怖しくなつ

たのであらう！、武士の家に奉公してゐれば這麼事は有勝ですよ、何も怖がる事はない、妾などは以前歴々の身分であつたが仔細あつて流浪して、津輕に來たものゝ、心は何時も大丈夫に持つてゐるから、斯る事には恟ともしない』

と、高慢たら〜。お花は突差に考へて、

お花『あの奥様え、以前は歴々の身と御仰いましたが、何處の藩士でございしました？』

お新『そりやお前、水戸藩で随分威張つたものだよ』

お花『あの水戸、その水戸を什麼して流浪なさいました』



お新「流浪した譯かえ、それは斯うだよ、四年ばかりあとの四月十六日、東照公のお祭典の日に旦那が僅な事で竹原町の沖田屋茂平といふ町人を斬り捨てたのが原因なんだよ」

と、べらくと自己等の舊悪を、人もあらうに現在の茂平の娘お花の前で喋つてしまひました。天に口なし人をもつて云はしむとは此の事です。お花はお新の言葉の終るや否や、バツと立ち上つて、

お花「珍しや中川大右工門の妻お新どの、妾は御身の夫大右工門が手にかけて殺した沖田屋茂平の娘でお花と申すもの、御身達に會んため長の辛苦艱難を致した甲斐あつて、今日それと知つてはもう逃がしはせじ」

聞いてお新は反倒るばかりに驚き旦那が呆きれて

お新「ヒエツ……」と云つたきり眼を白黒、お花は逃がしては大變と、お新の腰帶をといて轟と柱に結へつけました。お新は抵抗したけれど、戸田流の免許皆傳の腕前には敵ない、柱に結へられて青葉に煮湯をかけたやうになつて、ポロ／＼涙をこぼしてゐる。お花は其儘韋駄天走りに花房の屋敷に戻つて、遽だしく彦四郎の寐所に來て

お花「旦那様々々々」

と呼起すと、彦四郎は何事かと跳ね起きて

彦四「お花か」



お花「ハイ、お願ひで御座います〜」

彦四「遠くしく何事ぢや」

お花「ハイ、詳細話はあとで致しまするが、妾は親の敵を索ねる身で、姉と二人でこの津輕に參つたので御座います、その姉は乞食となつて現昌寺の裏の非人の群に這入つてゐます、それをあの中田大治郎さまが殺しに行かれました」

彦四「それは大變ぢや」

お花「所が中田大治郎と云ふのは眞父の敵中川大右工門に相違ない事を、大治郎の妻のお新の口から白狀致しました、何卒旦那様お手をお借しな

されて下さいませ」

彦四「うむ、拙者は始めから、私女が大望を抱いてゐると察してゐた、案に違ふ父の敵を尋ねてゐたのか、そして又拙者が君公に世話をした中田大治郎が敵であつたとは意外千萬、然らば和女達に援助致してやらう」と寢所を出て手早く仕度をし、兩刀腰に手槍を引提げ、お花續けと飛び出しました。騒ぎを聞きつけ忪の彦太郎、お花のためならと是また兩刀取つて飛び出すと、下男の八助も起きて来て、若旦那前もお供をと、闇を縫た四人は疾風の如く現昌寺さして急いだのであります。



(二十八)

此方は中田大治郎、足輕小者を引連れて乞食ヶ原に乗り込みました。お春の方では、いづれ復讐にくるであらうと思つたので、菰に包んでゐた來國光の一刀を取り出して、鯉口開いて待つてゐる。すると先刻の騒ぎに目を醒ました彼方此方の小屋の乞食連「なんだく」と飛び出して頭の權二の小屋前に集りました。

乞食「お頭、今のキャツズドンは何んでげせう」

權二「さア何んだか俺にも見當がつかねえ」

乞食「俺らの耳にはなんでも新米の壁の小屋の近所だと思つたがな」

權二「爾うかも知れねへ、手前行つて様子を見てこい」

乞食「合點でがす」

と駈けて行つたが直ぐに眞青になつて戻つて来て、

乞食「お頭ア大變だ」

權二「什麼したのだ」

乞食「壁の小屋の前に野郎が一匹殺されてゐるんですが、頭の頂邊から胴へかけて眞二たツになつて、赤い血を出して」

權二「馬鹿も休み休み云へ、赤い血つてこの闇黒の夜に血の色が見えるか



い』

乞食『それでも人が斬り殺されてゐりやア赤い血が出てゐるに決つてまさア、眞逆青い血や白い血は出ませんや』

權二『喧しいやい黙つてゐろ』

乞食『ふえッ』

權二『兎に角俺が行つて見やう、貴様達も従いてこい』

と大勢の乞食を連れて、お春の小屋に来て見ると髪をふり亂して今にも一刀の鞘を拂はんばかりの身構へをしてゐるので權二は騒きながら

權二『お春坊什麼したのだ』

お春『オヤお頭、まア聞いておくれ、先刻馬鹿侍士が新刀の試斬りに來たんだよ』

權二『試斬りだ……太い奴等だ、それでお前は什麼した』

お春『癪に障つたから侍の持つてゐる刀を引奪つて、反對に斬り付けてやつたら侍は逃げて、供の奴がこの通りに二つになつたのさ、妾は劍術も何も知らないんだけれど、侍に勝たといふは全く藥師様のお蔭だと思ひます』と、旨く護魔化すと權二を始め、一同の乞食は成程と感心して、權二『其奴は豪い事をした、なア同じ乞食でも藥師様を信仰してゐるから他の奴等とは一つにならねえんだ。へ、ンそれを知らねえで試斬りにな



んか来やアがる侍の間抜けさつたらねえや』

乞食『全たうお頭の云ふ通りだ、だがお春坊は豪いもんだなア』

褒めたり感じたりしてゐる所へ、ワツと鯨波を作つて乗り來んだ、大

治郎の一隊、お春はバツと飛び出して一刀の鞘を拂ひ、

お春『皆さん怪我があつてはなりません、妾は薬師様の御庇護でこの通り

足が立つた、この上は寄手を相手に戦ひますから、其處を退いて貰ひま

せう、怪我をしては詰りませんよ』

權二『何んだ、侍が復讐に來やがつた、それぢや捨ちや置けねえ、乞食ケ

原の仲間は皆俺の子と同じだ、それに指一本でも觸へられちや俺が頭だ

と日頃威張つて可られねえ、ヤイ貴様達、何んでも可いから獲物を持つて侍をぶん擲れ』

乞食『合點だ』と大勢の乞食は銘々に、竹杖やら棒切れやらを持ち出して

頭の權二を中心にぐるりとお春の附近に集まつた。權二は乞食をしてゐ

ても頭になるだけの奴で、血も涙もあるし、譯が解つてゐるから斯く努

力するのであります。ところへ乗り込んだ中田大治郎は大音揚げて、

大治『ヤイ躰女、貴様は思つたよりも手剛い奴だ、よくも先刻は拙者の下

男を手に懸けおつたな、今ぞ思ひ知らして呉れるから覺悟しろ』

お春『性懲りもないお侍、一つしかない生命が惜しくありませんか』



大治「何ッ」

權「何も絲瓜もあるものか、此のお春坊に指一本でも觸れて見ろ！貴様の生命はねえのだ、笠の台を失のふ氣なら懸つてこいッ」

大治「非人輩の癖に猪小才千萬、それ各々方」

と大治郎は先きに立つて手槍を奮つて突き立てる、十何人の足輕小者は銘々に獲物をもつて暴れ出したので、乞食の方でも獲物をもつて相手する、茲に乞食と安侍との大喧嘩となりましたが元來武士に乞食の敵ふ筈がないから、忽ち打ち惱されて散々に逃げ出す大治郎は手槍をすこいてちり／＼とお春に肉迫してゆく、お春は小太刀を青眼に構へ、杉を

大木を小楯に取つて、さア來い來たれと睨みつた。

(二十九)

危機一髪、此勝負はどつちが勝つても面白くない、大治郎が勝てばお春が返討ちになつた事になるし、お春が勝てば復讐はした事になるがお花にも討たせなければならぬのであるから都合がよくない。兩人は敵同士とは知らず、聊の事から鎖を鞘つてゐるのであるが運命の奇なる事はたい驚くの外ありません。

折柄、大地を蹴つて駆け來たつたる四人の男女、先登はお花次は花房



彦四郎、稍遅れて伴の彦太郎下男の八助であります。星明りに透して見れば、今や危機一髪の場合である、お花は吉廣の一刀の鞘を拂つて跳り込み、

お花「姉様、敵は何十人あつても必ず御心配遊ばすな、妹おれが、御主人花房様を案内致して、是まで助太刀に参りました」

と、大音聲に呼ばはると、大治郎に味方してゐた足輕小者共、善惡の差別なく血氣にまかして是まで來たのであるけれど、新參の中田大治郎より知行も各聲もずつと上の花房彦四郎が恐ろしいので此奴は堪らぬ逃げろくと秋の木葉の散るやうに、跡白浪と逃げて了つたので、中田はた

い一人手槍提げて、ばかんとして了つた、お春お花彦四郎彦太郎八助の五人はぐるりと其奴を取り巻いた。もう逃げるにも逃げられないのです。

お春「お侍さま、まだ悪戯なさいますか」

中田「ぶるくくく」

お花「姉様お聞きなさいまし、此の中田大治郎こそは正しく父を殺した當の敵中川大右工門でございますよ」

中田「ゲエツ……」と驚く。お春も呆れて、

お春「それでは此奴が彼の中川大右工門」

お花「ヤア中川大右工門、汝は今より四年前我父茂平を手にかき殺した事



はよも忘れはすまい、妾はその茂平が遺子のお花またそれなる非人妾は姉のお春なり、雨露にうたれて長年の辛苦し甲斐あつて、盲龜の浮木優曇華の花、此争で會ひしは汝の悪運盡るところ、いざ尋常に勝負せよ』お春『今更卑怯に逃げ隠れは致すまい、いざ勝負々々』

と、左右から詰め寄せます。大右衛門は考へた、お春といふ非人になつてゐる奴が、先刻の振舞にすら舌を捲いてゐるのだ、お春一人にでも自分の腕で勝るか什麼か疑問である、所へもつて来て妹と名乗る奴がある彦四郎がある、彦太郎がある、八助がある、隙を見て逃げやうとすれば遠くから大勢の乞食が見張してゐる、そりや不可ん、駄目ぢやと凹んで

了ひました。

中田『アイヤ町人茂平の娘 お春 姉妹如何にも拙者は仔細あつて四年以前に汝の父茂平を斬り捨て、それ以來此の拙者を敵と狙つたとは感心だ、斯うなれば致し方がない、尋常に討たれてやるから汝等の自由にせよ』悪人ながらも流石に武士、翻然と悔悟したのか手槍を捨て大地にべつたり座る、この有様を見て花房彦四郎は進み出で、彦四『よく改心した、罪を隠し名を偽つて他家へ入り込む曲者なれば、踏み込んで討つ筈だか、改心すれば拙者とは朋輩、武士の情をもつて此場は手出しをせぬ』



と云つて置いて偕て姉妹に向ひ、

彦四「此邊で敵が取りたからうが、それでは法式に叶わぬゆえ、一先づ大右衛門は屋敷へ連れ歸り殿に御願ひしてから敵を討つがよからうぞ」云はれて見れば尤もであるから、お春もお花も文句はない。そこで中川大右衛門は、生捕りとなつて四人のものに護送されて、花房の屋敷に連れこまれた。お春は一人あとに残つて、例へ乞食でも仲間と思へばこそ種々と盡してくれた恩を思つて、頭の權二に會ひ、用意の金子十兩取り出し、一同に分配をやつてくれと渡す、權二も大層喜び且つ手品の種がわかつたので、もうお春を乞食遇いにしない、叮嚀に禮を述べ、お春も

世話になつた禮を述べて、さらば〜と袂を分ちました。

翌日未明に、花房彦四郎は登城して、津輕甲斐守に拜謁し、一伍一什を奏上すると、甲斐守には、甚くお春お花の孝心を賞でたまひ、

甲斐「うい奴ぢや、目通り許す苦しゆうない連れ參れ」との上意。

彦四郎は面目を施して下り、早速お春姉妹に此事を伝える、家中は轉倒るやうな騒ぎで、湯を拂かしてお春を入浴させ、乞食の垢をすつかり落し、奥方自ら髪を結んで下さる、白粧を塗けて下さる、化粧もすんで美々しく衣裳を飾り、彦四郎に従つて甲斐守の御前に出ました、此處で恩賞に預り、特に甲斐守の所望で、お春は太刀を取り、お花は薙刀を



取つて、試合をして御覽に入れたのであつた。上首尾で御殿を下る、此方、中川は牢屋は住居、妻のお新はこの事を傳え聞いて、とても助らぬ命と観念したのか、我と我舌を噛み切つて自殺致しました。同じ死ぬのなら武士の妻であるから、懐劍で咽喉でも突いて死ねばよいのに、亭主か亭主なら女房も女房だと、冷笑する者ばかり、飛んだ恥を曝しました。

(三十)

偕て甲斐守は、當城下で敵討ちをさせてやらうかと思ひましたが、お

春姉妹が水戸の者であり、中川大右工門が水戸の家來で、閉門中に逃げたのであると云ふから、一應照會して見やうと使者を立て、今般の次第を届けられた。すると水戸宰相は、當方で敵討ちをさせるから御渡し下されいと目付役をもつて交渉される、然ばと云ふので、お春姉妹と中川大右工門を水戸の手に引渡した。斯くて愈々明和六年八月十四日常陸の國中の湊といふ行で勝負する事に決したので、津輕からは藩主津輕甲斐守名代として家老森主膳、娘兩人の後見として、花房彦四郎、岩城平の城主安藤對馬守名代として四津倉典膳、娘兩人の後見として戸田平九郎などの面々が、いづれも水戸に到着しました、中湊の仇討場では、竹



行馬等の準備萬端が十二日までにはすつかり出来て了つた。

仇討の光景などは是までの普通の講談本に詳細いから、くどくしく書く必要もないがザツト記して見ると、十四日の早天から此の仇討ちを見ずんばある可からずと、近郷近在から押し寄せた群集が行馬の外に雲霞の如く集まつてワイ／＼ザワ／＼と騒いでゐる。行馬の内部南の方に御目付役、西には水戸宰相、北には津輕候御名代、東には安藤候御名代、其他役々の面々夫々に詰合つて今や遅しと待つてゐると、ドン／＼ドーンと云太鼓の音につれて西の方から髯ツ面の中川大右工門が、八丈大縞の廣袖に朱鞘の大小を提帶へて悠々と出てくる。數萬の群集は口々

に、「悪黨！」とか「ヨウ石川五右工門」とか「早く殺されて了へ」とか、憎いといふ人情が一致してワァーッと云ふ騒ぎ、ために天地が轉倒して山岳が頽れるかと思はれた。東の方からは兩人の娘が揃えの白羽二重の大振袖を着し、髪は島田に結こなして、白の鉢巻白の綾襷、足の運びも静々と、お春は來國光の小太刀を、お花は薙刀を提げて進み出る。郡集は又もやワァーッと騒ぐ、大右工門も姉妹も定め的位置に着くと、目付役が仇討の趣意書を読み上げる、其文に曰く

水戸舊家中

中川大右工門

其方儀云明和二年四月十六日重き御神事の砌竹原町の町人沖田屋茂平

双子の仇討



纒むすの慮り外わ有り之をを咎とがめ御時節ごじせつも不顧我意かへりみずがいを相立手討致あいたててうちいたし候さうろに付閉門申付つきへいもんまうしつ置あきたる處ところ自分じぶんに出奔致しゅつほんいたし主人しゅじんを誑あざむき候いた致方重々かたじゆう不届至極似ふといきしごくこれによつ之を重おもき御ご仕置しおきにも可彼相行處あひおこなわるべきところ右沖田屋茂平みぎおきたやもへいの娘共亡父むすめどもはうふの仇討願出猶他國迄相響かたきうちねがひいでなほたこくまであひひびき候義ぎ旁々かたかた被思召格別おほしめされかくべつの御赦免ごしやめんを以もつて互格ごかくの立合勝負被仰付たちあひせうぶおせつけれるゝとの御意ごいなり

竹原町沖田屋茂平娘

花春

其方共中川大右工門そのほうどもなかがはたいうゑもんに親を討おやれ其意趣そのいしゆを晴はらし度幼少たくえうせうにて多年諸國流浪たねんしよこくろう

致いたし辛苦しんくを碎くだき中川大右工門なかがはたいうゑもんを見出みだし無餘義よぎ願なぐねがひあげさうろ上候つきあだうちおせわたさに付仇討被仰渡つきあだうちおせわたさ候事さうろこと

明和六年八月十四日

右みぎを讀よみ終おはると酒さけくみ交かはし、仇討あだうちの儀ぎ式しきを終おはると半鐘はんせうがヂヤンちゃんくと鳴なると火事くわじだがカンかんくと鳴なる、するとお春はるが一刀いっとうの鞘さやを拂はらひヤアやあくと、中川大右工門なかがはたいうゑもん、我父わがちちを殺害あやりし仇思かたきおもひ知しれよと名乗なりかけて斬きり込こんでゆくと、大右工門斯だいいうゑもんこうなれば死物狂しにものぐるひ、度胸どきやうを据すて大刀だいたうの鞘さやを拂はらつて受うるお春はるの背後うしろには鐵扇てつせんを韝しつかと握にぎつて戸田平九郎とだへいが後見こうけんしてゐる、危あやなかつたら助太刀すけだちする心算こころであつたが、女をんなの一念いちねんで磨みがいた腕うでは中々なか鋭とく、次第しだい

双子の仇討

二二九



々に大右工門の方が受太刀になる、助太刀などは不用いのであつた。  
 稍霎時斬り結んでゐる内、大右工門は五六ヶ所の手傷を負ふたので一先  
 づ引分け役が引分けて休息させ、傷の手當をして、水を吞ます。する  
 と又もやカン／＼と鐘が鳴るので大右工門は蒼い顔して立ち上ると、お  
 春に代つてお花が薙刀を水車の如く振り廻して斬り結ぶ、後見として花  
 房彦四郎が頑張つてゐるが是も助太刀は不用い、兎角する内大右工門も  
 數多の手傷を身にうけて苦痛のあまり太刀先もしどろもどろに亂れ、果  
 はヤツと斬り込む薙刀に右足を拂われ一本足、よろめく所を石突でドン  
 と突れて、ぱつたり倒れる、お花は薙刀を捨て小刀の鞘を拂ひ、父の仇思

ひ知れよ』と止めをさす、するとお春も駈け寄つて『思ひ知つたか』と  
 叫びさま打ち落す太刀風、あはれ、大右工門の首は胴から離れころ／＼こ  
 ろ。是で仇討は無事に相済みました。

中川大右衛門は三十五歳を一期として、孝女の刀の銷となつたのも悪事  
 の報、悪は永久に榮えずとはよく云つたものであります、お春姉妹は  
 水戸宰相に御褒めの言葉を頂き、天晴れの者よ孝女の鑑よと津々浦々に  
 謳れました、後してお春は戸田平九郎と夫婦となり、お花も房方に  
 貰われて、戀人彦太郎と天下晴れての夫婦になりました。斯くて沖田屋  
 の家はお幹の弟良助が末子良之助を以つて相續さし、いづれも子々孫



家庭新講談  
 彌榮へたと申うします。

双子の仇討終

双子の仇討

東京市大塚區駒込一丁目四拾八番地  
 發行所 講談社  
 電話上谷四〇五九  
 東京事務所後口橋下六三九

大正十二年六月十七日印刷  
 大正十二年六月十七日發行(共價各冊拾錢)

著者 市村 裕  
 大正十二年六月十七日發行(共價各冊拾錢)  
 東京市大塚區駒込一丁目四拾八番地  
 發行所 講談社

印刷者 大取次販賣  
 東京市大塚區駒込一丁目四拾八番地  
 印刷所 講談社

大取次販賣 東京市大塚區駒込一丁目四拾八番地  
 印刷所 講談社

不許複製



當代青年の代表演説

剛健なる青年の必讀すべき無二の産物  
 帝國大學早稻田大學はじめ官私各學校の學生雄辯家  
 が其勉勵と努力と精力とを傾倒したる代表的演説にし  
 て既に好評噴々たりしもの三十一編をあつめたり……

大日本雄辯會編  
**青年雄辯集**

三六版七百頁  
 美裝函入

八月月上旬發行

演説練習者の好模範!!  
 朝々として高讀せば悉くこれ名調子の演説たるべし。即  
 携帶の至便を計りて三六版とし音讀の利を思ふてふりか  
 なを附せり、綠蔭、水邊、現代青年銷夏の好同伴也……  
 理想ある青年の寸時も離し得ざる書籍

東京駒込八下 大阪 大日本雄辯會發行 振替口座 三三〇九

ゾツトする事實

- ▲美探 枕深し洋妾 お梶の探偵
- ▲神鬼 出短銃強盜 清水定吉
- ▲聯隊 烈婦 村田さは子
- ▲の行衛 呪の古井戸
- ▲樂通 湯島兩替店の秘密
- ▲強盜 三人 湯島兩替店の秘密
- ▲最近 探偵十種
- ▲暗殺 少警部 中原尙雄
- ▲強盜 阪本慶次郎逮捕の顛末
- ▲志士の 大臣暗殺の陰謀
- ▲素人の 落語家文太郎の入墨
- ▲強盜 漆屋殺し事件
- ▲酷薄 漆屋殺し事件

明治三十三年刑事  
 學校に於て、故武  
 東警部が實歴の講  
 演をした事がある  
 本書は主として材  
 を此に取り、其他  
 當時の新聞紙及老  
 刑事の實歴談に依  
 りて成りたるもの  
 片々たる架空談と  
 同一視すると勿れ  
 定價一部六十八錢  
 郵税六錢三〇〇頁  
 東京本郷團子坂  
 發行所 講談社  
 口座六六二九

一讀鬼氣に逼人



讀書界への新提供

緑蔭銷夏の好讀物出づ

# 活動寫眞

**大正時代は活動寫眞全盛也**

▲講談社編輯部編 ▲高島華宵氏畫

大正時代の新産物、天下の人氣は、活動寫眞の普及に依りて立つて居る。其の流石なところは、見る者の心を、一瞥のうちに、その世界に連れて行かせることである。これは、非但し、見る者の心を、一瞥のうちに、その世界に連れて行かせることである。これは、非但し、見る者の心を、一瞥のうちに、その世界に連れて行かせることである。

▲菊中裁版三百五十頁 ▲表紙石版淨き出し奇装 ▲定價三十五錢送料四錢

東京駒込 講談社 攝替口座東京六六二九

●泰西悲劇マ ●勤王美談秋田義民傳 ●喜劇小猿七之助 ●喜劇日本ジゴマ ●喜劇江島屋騒動 ●喜劇吞込み久太 ●泰西悲劇マ

活動寫眞は變化百出自在也

大山千代雄著—英雄を造つた英雄傳

# ブリュタールク英雄傳

四六判美裝約二百五十頁 正價五十錢郵稅六錢

- 目
- 一、歴山大王
  - 二、シーザ
  - 三、ハンニバル
  - 四、ブルタス
  - 五、テミストクレス

英雄を造れる英雄傳にして世界到る所好評湧くが如きの活躍史。ナポレン、ワシントン等が愛讀して措かさしもの、希望多き有爲の青年は飯をやめても之れを讀まれよ！

發行所 本日本大 雄辯會 町阪駒本 下込郷



月刊雜誌

講談俱樂部

誰が読んででも堪らなく面白い  
 雑誌は「講談俱樂部」であるといふ  
 事は世間の定評です。毎號講談、落語  
 浪花節、小説、脚本、活動寫真、演藝評判記  
 等の素敵に面白いものがドツサリ載  
 せてあります。それに口繪は眼が醒め  
 さうな綺麗なものばかり集めてあ  
 りますから、春は花の下、夏は涼み童  
 秋は燈火の下、冬は埋火の邊り、皆様  
 が友達としてこの上もない雑誌  
 であります。

第一冊 金廿六  
 第二冊 郵税郵册二十  
 第三冊 郵税郵册二十  
 第四冊 郵税郵册二十  
 第五冊 郵税郵册二十  
 第六冊 郵税郵册二十  
 第七冊 郵税郵册二十  
 第八冊 郵税郵册二十  
 第九冊 郵税郵册二十  
 第十冊 郵税郵册二十

東京本郷團子坂  
 講談社  
 口座六六二九

……▲講談界の大異彩▼……

第一編 寺澤 琴風先生著  
 第二編 倉富 砂郎先生著  
 第三編 祖 先 の家

第六編 洞 殿 司先生著  
 第七編 夢 想 兵衛先生著  
 第八編 望 月 紫 峰先生著  
 第九編 伊 藤 探偵 鐘 崎 三 郎

●●家庭新講談●●

第三編 小川 煙 村先生著  
 第四編 夢 想 兵衛先生著  
 第五編 大河 内 翠 山先生著  
 第六編 丹 後 の 夜 嵐

第九編 市 村 俗 佛先生著  
 第十編 伊 藤 探偵 鐘 崎 三 郎  
 ……▲知名文士の新作▼……



趣味横溢家庭の一

▲講談社編輯部編 ▲高島華宵氏裝順 ▲製本既成  
 小烈女俠妓

三百六十餘頁  
 總クローリス  
 美裝國入  
 定價金七拾錢  
 郵送料金八錢

濃艶、凄艶、女の中の女と天下に誇るべき美人の物語り、筆者悉く熱血を灑ぎ、出版者は出來得る限り勉強を試みたり、讀者は必ずや善哉善哉と呼び給ふべし

絶好讀み物出でたり!

烈女梅勝野香  
 俠妓小梅勝野香  
 お瀧姐  
 奴の音  
 齋藤お音  
 瓢屋お音

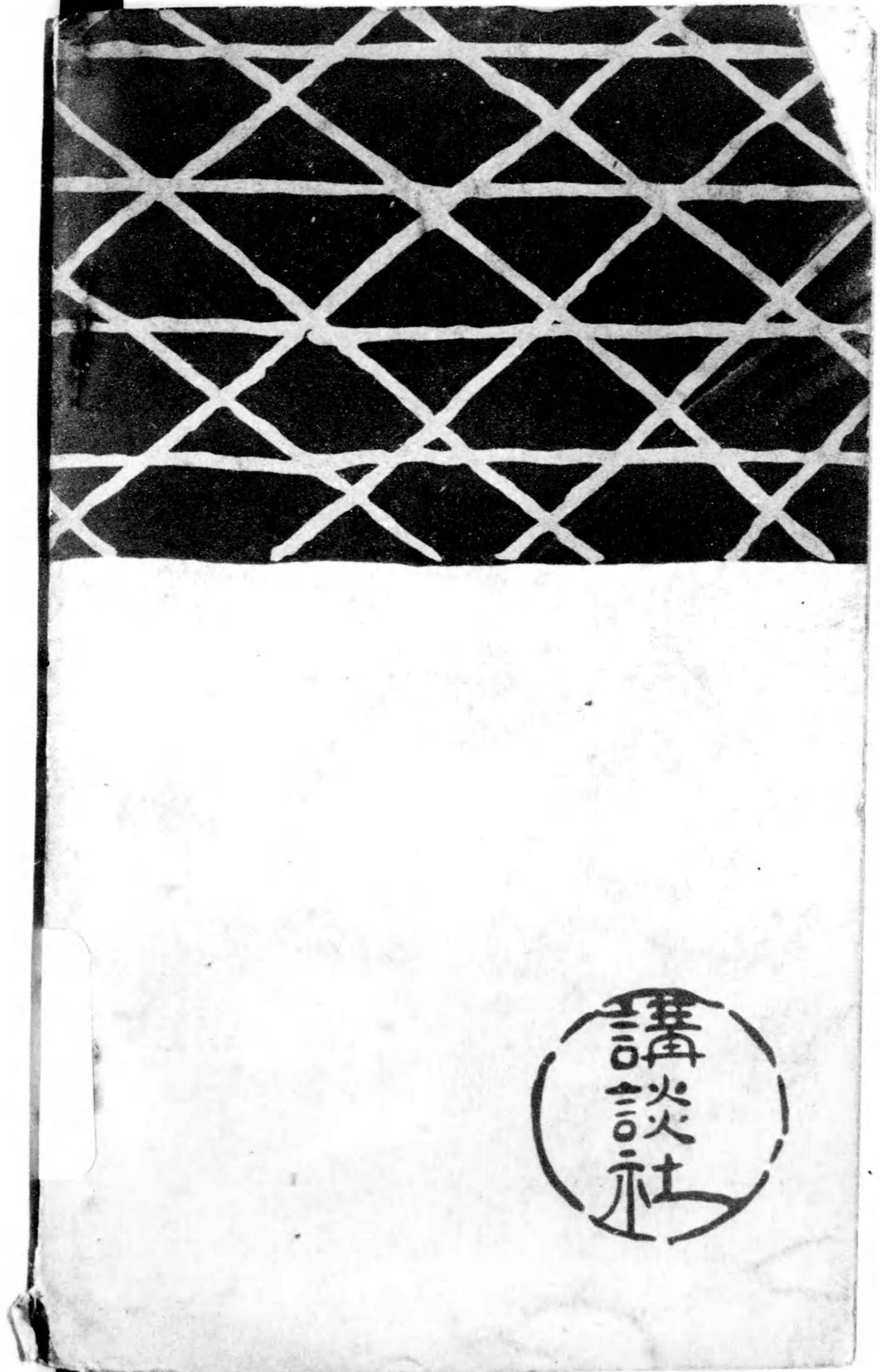
東京駒込團子坂  
 講談社  
 振替口座六六二九  
 賣捌全國各書店



274  
371



終



講談社